



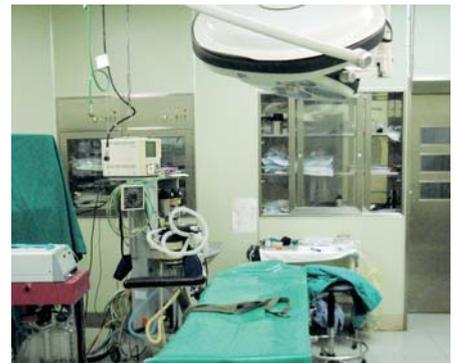
MARCH 2010

No.17

東京大学医学教育国際協力研究センター  
International Research Center for Medical Education

# CENTER NEWS

[www.ircme.u-tokyo.ac.jp](http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp)



## Contents

● JICAラオス国セタティラート大学病院 医学教育研究機能強化プロジェクト ..... 2 講師 大西 弘高	● 韓国出張報告 ..... 5 講師 大西 弘高
● ラオス保健科学大学における 国際学術交流助成事業 ..... 2 講師 大西 弘高	● インドネシア出張報告 ..... 5 講師 大西 弘高
● アフガニスタン国別研修「医学教育2」(7・11月) ..... 2 講師 大西 弘高	● 米国医学教育学会(AAMC)報告 ..... 5 講師 錦織 宏
● 第9回医学教育国際協力研究フォーラム ..... 3 特任研究員 片山 亜弥	● 台湾医学教育学会報告 ..... 5 講師 錦織 宏
● 東京大学医学教育セミナー ..... 3 事務補佐員 三浦 和歌子	● 初期研修の人気ランキング全国第1位の 東京医療センターでの研修医を観察して思うこと ..... 6 東京医療センター・臨床研究センター長・IRIME名誉センター長 加我 君孝
● シンガポール出張報告 ..... 4 教授 北村 聖	● 2009年度東京大学医学部FD(医学教育研究会)報告 ..... 7 講師 錦織 宏
● 台北出張報告 ..... 4 教授 北村 聖	● New England Journal of Medicineを用いた臨床診断推論の授業 ..... 7 講師 錦織 宏
● 欧州医学教育学会(AMEE)報告 ..... 4 講師 大西 弘高 講師 錦織 宏	● 模擬患者つっじの会 ..... 7 特任研究員 三木 祐子
	● センター日誌/編集後記 ..... 8

## JICAラオス国セタティラート大学病院 医学教育研究機能強化プロジェクト

講師 大西 弘高

2009年6月にJICAによる中間レビューを終え、プロジェクトは保健科学大学や教育病院全体を巻き込んで展開し始めた。10月からは、Champasak、Savannakhet、Luang Prabang、Vientianeの4県での指導医養成WSを実施しつつ、これらのWSを指導できる医学教育専門家の育成に取り組んでいる。

また、10月に行われた第3回医学教育セミナーでは、タイKhon Kaen病院のDr. Satangを招き、地域でのプロフェッショナル教育についての講演を聞き、ラオスでも一気に臨床倫理や現場でのコミュニケーションを含めた議論が高まった。2010年1月に開催された第1回医学教育シンポジウムにおいて、大西がこれらの流れを概括したところ、Pommeck保健大臣がプロジェクトの成果を大いに政策に採り入れていきたいとのコメントを残されるなどの動きがみられている。

### ● 進捗概要(2009年8月～2010年3月)

10月4～16日	Champasak, Savannakhet 各県病院指導医養成WS
10月21日	第3回医学教育セミナー(Dr. Satang, タイ Khon Kaen 病院)
1月6日	第1回医学教育シンポジウム
1月31日～2月4日	Luang Prabang 県病院指導医養成WS
2月10～11日	市内4病院向け指導医養成WS
2月15～17日	Maria Teresa (Vientiane 県) 病院指導医養成WS
3月9日	第6回 Joint Coordinating Committee
3月10日	第2回医学教育シンポジウム

### ■ センター教員渡航

大西弘高講師(団長)

2009年9月29日～10月30日(32日間)、12月24日～2010年1月7日(15日間)、1月26日～2月19日(25日間)、3月1日～16日(16日間)

北村聖教授

2009年11月12日～26日(15日間)



▲ 指導医養成WSにおけるOSCEデモの様子

## ラオス保健科学大学における 国際学術交流助成事業

講師 大西 弘高

平成21年度東京大学国際学術交流助成事業において、保健科学大学に「東京大学医学教育共同研究センター」を設置することとなった。主目的は、医学教育領域の修士課程の立ち上げである。

10月に内田浩子特任研究員を当事業の担当とし、2週間の滞在期間において、現地にセンターを開設するための手続きを行った。また、この事業の資金で同時期にシッフル友恵特任研究員が赴き、カルガリー大学が実施してきた家庭医療レジデンスプログラムの意義や地域に及んだ影響について調査を行った。また、医学教育国際協力研究センターから100万円を出資して、ラオスで初の医学雑誌を立ち上げることも決定した。

共同研究センターが保健科学大学の卒後教育部門棟2階に新しいオフィスを構え、上記事業が開始されつつある。JICAプロジェクトと絡めて、継続的な支援を期待した矢先、政権交代に伴う事業仕分けにより、平成22年度の実施が凍結されるとの情報が入った。外交的にも影響があり、戸惑っているのが現状である。



▲ 国際学術交流助成事業の機材供与記念式典

## アフガニスタン国別研修「医学教育2」(7・11月)

講師 大西 弘高

2005年7月～2008年6月に実施された「JICAアフガニスタン医学教育プロジェクト」のフォローアップという枠組みで、JICA側で年2回の国別研修を実施する予算が確保されるに至り、当研修事業を東京大学医学教育国際協力研究センターが受託する形を採っている。なお、上記プロジェクトにおいては、Kabul医科大学(KMU)からの参加者がほとんどで、地方の医学部からは、Nangarhar大学医学部から2名来日に留まっていた。しかし、フォローアップの国別研修では、KMUに培われた医学教育の専門性を地方に広げるという観点から、地方大学医学部の教員も日本に招く計画となった。

2009年7月には、KMUから6名、Nangarhar, Alberony, Kandahar, Herat, Balkh, Khostの地方大学医学部から各1名の計12名が来日した。また、11月には、KMUから6名、Nangarhar, Herat, Balkhの大学医学部から各2名と、Alberony, Kandahar, Khostの大学医学部から各1名の計15名が来日した。プログラムはそれぞれ7月6日～8月12日、11月4日～12月10日の約6週間ずつ。国際保健医療学会学生部会との共催によるワークショップ、国内施設見学旅行(8

月は山梨～長野、12月は沖縄)など、楽しみつつも学習が深まるプログラムになった。

なお、11月には、大西が現地に赴いて、全国医学教育ワークショップを通じてKMUと地方大学医学部の連携をさらに強化する予定であった。しかし、10月末に大統領選挙があり、その選挙の民主的実施を援助していた国連関係者が、宿泊中のゲストハウスにて襲撃されるという事件が起こり、JICA側の指示によって派遣が中止されるに至った。人材育成は10年、20年先を見据えた国際協力であり、治安回復や経済状況の改善を待ってという訳にはいかない。今後も安全に十分な配慮をしながら、フォローアップを継続する予定である。



▲ アフガン国別研修学生ワークショップ全体写真

## 第9回医学教育国際協力研究フォーラム

特任研究員 片山 亜弥

当センターでは、医学教育研究・国際協力による人づくりについて議論する場として、概ね年1回、医学教育国際協力研究フォーラムを開催してきた。今回は、ちょうどラオスにおいてJICA技術協力プロジェクトを実施しているということもあり、「ラオスにおける医療人材育成」をテーマに、専門家の方々から、保健人材育成の世界的なトレンド、JICAの取り組み、医学・看護教育の現場などについてお話を聴くことができた。

神馬氏は、保健人材育成に関する国際的な動きについて概観し、非感染性疾患の重要性やそれに対処するための薬剤Polypillsの出現について興味深い話題を提供された。相賀氏は、JICAの立場を代表して、保健人材育成の戦略や取り組みを説明された。戦略の柱として量的側面、質的側面、システム改善を戦略の柱にしているとのことと、この枠組みは保健人材育成を考える上で、今後も役に立つと思われる。

上記お二人の政策的なお話に加えて、ラオスで活躍する専門

家からも現場のお話を伺うことができた。清水氏は、ラオスでのボランティア経験を基に、看護教育の現場や地域格差の現状などについて、ラオスからお招きしたセタティラート病院カンペ副院長は、医学教育を取り巻く現状と問題点について包括的に報告された。最後に、大西講師は、ラオスでの活動経験も踏まえつつ、途上国のみならず先進国でも問題となってきた総合医と専門医のバランスについて、その施策を中心に議論した。

今回は、66名という大勢の参加者にご出席いただき、パネルディスカッションでは、地方への若い医師の派遣など日本でも見られる問題についても議論が深まり、盛況のうちに閉会することができた。



▲ パネルディスカッションの様子

### <プログラム>

#### 第一部 講演

～ラオスの医療人材育成の取組み～

- (1) 「医療人材育成の世界的なトレンド」 東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教授 神馬征峰
- (2) 「保健人材育成に関するJICAの方針」 国際協力機構（JICA）国際協力専門員 相賀裕剛
- (3) 「ラオスの看護の現場から」 元JICAラオスシニア海外ボランティア 清水直美
- (4) 「ラオスの臨床教育体制の現状と今後の展望」 ラオス国セタティラート大学病院副院長 Khampe Phongsavath
- (5) 「途上国における総合医と専門医のバランス」 東京大学医学教育国際協力研究センター講師 大西弘高

#### 第二部 パネルディスカッション

～ラオスの医療人材育成の促進に向けた提言～

## 東京大学医学教育セミナー

事務補佐員 三浦 和歌子

回	開催日	テーマ	講師
第13回	2009.7.15	Value and Promotion of the Clinician-educator in the United States (「米国における臨床教育家への評価～その昇進について～」)	レベッカ・ハリソン 東京大学医学教育国際協力研究センター特任准教授 オレゴン健康科学大学 准教授
第14回	2009.9.16	教育プログラム評価とは	大西 弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター講師
第15回	2009.10.28	応用PBL (Applied PBL) - すべての学びの場にPBLを	神津 忠彦 東京女子医科大学名誉教授
第16回	2009.11.13	Changes in U.K. Medical Education (「英国医学教育の新年の動向」)	ジョン・リース ロンドン大学キングズカレッジ教授
第17回	2009.11.18	医学教育学者は本当に必要なのか？ -臨床医とのコラボレーションを目指して-	西城 卓也 名古屋大学医学部附属病院総合診療部助教
第18回	2009.12.9	Preparing Medical Students to Treat Diabetes (「糖尿病診療を医学生に教えること」)	ボブ・アンダーソン University of Michigan Diabetes Research & Training Center教授
第19回	2009.1.27	医学教育者のコンピテンスと養成プログラム	田川 まさみ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医歯学教育開発センター長・教授

当センターの好評月例企画「東京大学医学教育セミナー」について、昨年7月から今年1月に開催したものを一覧にまとめた。当センターの名誉客員研究員である神津忠彦先生(写真)をはじめ、国際的な視野を持った医学教育学の専門家のシリーズの講演は、当センターならではの企画であると自負している。本セミナーは毎回ビデオに収録しVOD(Video on Demand)の形で配信している。当センターのホームページ (<http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp>) からアクセスできるので、ぜひご視聴いただきたい。



▲ 医学教育セミナーでの神津忠彦先生

## シンガポール出張報告

教授 北村 聖

さる2009年11月3日から7日までアジア太平洋医学雑誌編集者会議 Asia Pacific Association of Medical Journal Editors (APME) に日本医学雑誌編集者会議を代表して参加してきた。この会議は約3年前に結成され、日本は当初はオブザーバーであったが2年前から正式に参加している。この会議の目的は世界保健機構 WHO のアジア太平洋事務局と協力してこの地域における 1) 医学雑誌の出版を推進し、2) 学会活動の活性化を支援し、3) 医学雑誌の質の向上に寄与しようとするものである。いわば日本における学会の集合体である医学会のような動きをアジア太平洋地域の国々が集まって役割を果たそうという会議である。自分自身もう4度目の参加であり顔見知りも多く和やかな雰囲気に参加することができた。最初2日間はホテルの会議室で円卓で運営から今後の取り組み課題などビジネスミーティングがなされ、あとの2日間はがんセンターに場所を移してシンポジウムとワークショップが開催された。主な話題は雑誌の質の向上であり、MedLine に登録されるほどの充実が一つの目標として話し合われ、さらに今回は世界の医学教育の潮流と同期してプロフェッショナリズムの教育が話題のひとつとなった。



▲ APAME AND WPRIM 集合写真



▲ シンポジウムにて

## 台北出張報告

教授 北村 聖

さる2009年8月16日から20日まで台湾国の臨床研修評議会の招きで台北と台南を訪問した。台湾でも近い将来臨床研修を必修化することになっており、そのため米国や日本の現状や経験を学ぶためのシンポジウムが開催され、そこで日本の経験を発表させてもらった。台北のシンポジウムでは台湾の現状の報告について、米国の状況を ACGME の重鎮の Dr. Opas が特にプロフェッショナリズムの教育に重点をおいて話された。日本の状況は自分と京都大学の平出教授が報告し、多くのそれも具体的な事項についての質問が相次いだ。われわれの予想以上に、日本の共用試験や必修化研修制度は台湾の医学教育者に知れ渡っており、それなりに高い評価を受けていることが理解された。翌日から2日間にかけ台北市内の三軍病院と台南市の成功大学付属病院を視察し、研修病院としての認定書が渡された。台北市内の101ビル、日本の作った新幹線、古都台南など学術以外にも印象に残った出張であった。



▲ 台湾 Medical Education Conference

## 欧州医学教育学会 (AMEE) 報告

講師 大西 弘高

講師 錦織 宏

欧州医学教育学会 (AMEE: Association for Medical Education in Europe) は、現在医学教育領域において国際的な参加者を最も多く集め、活気のある学会と言えるだろう。この2~3年は、2000人近い参加者が来場するが、そのうち2割ほどはアジアからというように、影響は欧州だけに留まらない。2009年は8月29日~9月2日の会期にてスペインのマラガにて開催された。

大西は、以前日本医学教育学会医学教育研究開発委員会において実施した「診断に関する情報を得ることで、医学生のコミュニケーション技法はどう影響されるか」という研究についてのデータをまとめて発表した。共用試験 OSCE のトライアルの時期に、医療面接ステーションのシナリオにおける診断の情報が、午後には学生に漏れていたように思われたにもかかわらず、午後の学生はコミュニケーション技法に負の影響が生じていたという観察結果が知られていたため、これを検証するための実験的な取り組みを行ったのであった。

AMEE の利点は、議論が比較的オープンに行われ、アジアからの参加者に対してもあまり差別的な印象の反応がないことであろう。この学会を支えてきた面々が、以前からそういった面を重視してきたからだろうか。今後とも、この学会には継続的に出席することで、国際的に通じる医学教育研究に関わっていきたいと感じている。

毎年参加している欧州医学教育学会 (AMEE: Association of Medical Education in Europe) ですが、2009年はスペインのマラガで開催された。約2500人が参加するこの学会には、医学教育学分野の巨人が集まり、世界の医学教育学の潮流に触れることができる。私は昨年の Medical Teacher 誌に掲載した論文の内容である、医学生の海外での臨床実習の学習アウトカムに関する研究の発表を行ってきた。医学教育学分野の国際学会は他にもあるが、この AMEE は多種多様な参加者に広く門戸を開いているのが特徴で、欧州のみならず世界中から参加者が集まる。今年は日本からの参加者も増え、初の20名規模の "Japan Night" なる夕食会を開くこともできた。また、自分が留学していたダンディ大学のブースでは、恩師の先生方との再会を楽しむことができた。



▲ 発表：医学生の海外での臨床実習の学習アウトカムに関する質的研究

## 韓国出張報告

講師 大西 弘高

韓国では、2009年9月23日から韓国保健医療人国家試験院にて医師国家試験の実技試験が開始され、九州大学の吉田素文先生と共に、9月24日に見学させていただく機会を得た。この試験の大きな特徴は、①OSCE（具体的な技法）6ステーション、CPX（模擬患者相手のコミュニケーション中心）6ステーションの計12ステーションからなる、②全てソウルに1カ所しかない国家試験院で実施される、③地域毎の実技教育コンソーシアムが2002年から教育改革を先行させ、近年は独自のCPXを展開している、④OSCEは教員、CPXはSPが評価する、といったところであろう。

2009年11月10日には、この内容について学内にて報告会を行った。わが国でも臨床実習後のOSCEを医師国家試験の一部にするという議論がはじめて久しいが、韓国での医師国家試験実技試験開始の情報が、いくらかでも刺激となり、医学部卒業時の臨床技能担保の流れが生まれれば幸甚である。



▲ 韓国医師国家試験実技試験の様子

## インドネシア出張報告

講師 大西 弘高

2009年12月4～6日に、ジャカルタ市に位置するインドネシア大学医学部講堂にて、第2回 Jakarta Meeting in Medical Education が開催された。今回のテーマは、「コンピテンシー基盤型カリキュラムの実施における近年の課題：倫理、プロフェッショナリズム、クリニカル・クラークシップ」であった。

大西は、「プロフェッショナリズムをどう教えるか」と題しての発表を行った。主に、東京大学医学部で4年生に実施しているPBLによるプロフェッショナリズム教育、国立病院機構の尾藤先生が主導してきた科研費研究班による成果などについて話すことができた。

インドネシアでは、ダンディー大、マーストリヒト大、メルボルン大などに医学教育に関する修士課程、博士課程に留学する若手医学教育者が増えている。医学部は現在54カ所あるようだが、人口2.3億人の国には今後私立を中心に、ますます設立されていくことが予測されている。今後、医学教育のますますの発展が期待される国といえよう。



▲ インドネシア医学教育学会

## 米国医学教育学会(AAMC)報告

講師 錦織 宏

2009年の11月8日から3日間、ボストンで開催された米国医学教育学会(AAMC: Association of American Medical Colleges)に参加してきた。今回は学会参加に加えて、当センターの元助教である大滝純司先生（現東京医科大学医学教育学講座教授）と、当センターの元客員教授であるGeorges Bordage先生（現イリノイ大学シカゴ校医学教育学講座教授）との研究の打ち合わせも主な業務内容である。前回のセンターニュースでも紹介した、当センター発の身体診察の教育法(HDPE)に関する本研究は、米国での取り組みの内容が一本 Medical Education 誌に掲載され、日本での取り組みも現在まとめているところである。学会では身体診察教育に関する講演なども聞けて、いろいろとアイデアも湧いてきた。学会期間中、風邪のために体調不良であったが、研究の打ち合わせも含めて、収穫の多い米国滞在になった。



▲ イリノイ大学シカゴ校医学教育学講座の50周年記念パーティにて

## 台湾医学教育学会報告

講師 錦織 宏

2009年の10月30・31日に高雄医科大学で開催された台湾医学教育学会で招待講演の招聘を受け、近年の日本の医学教育全般の状況について話してきた。台湾の医学教育学会は毎年丸1日の日程で開催され、今回は高雄医科大学の主催である。学士入学制度の是非が近年のトピックのようで、シンポジウムでは導入した数校のデータをもとに議論がなされていた。海外からの招待講演では他に、昨年国家試験OSCEを導入した韓国からDr. Jung-Gi Im、毎年アジア太平洋医学教育学会を主催しているシンガポールからDr. Matthew Gweeが来られて、両国の医学教育の近況について話されていた。歴史的に台湾は日本との関係が強いこともあってか、特に年配の先生を中心に、日本語の堪能な方が多くおられたのは驚きであった。医学教育はその国の文化や制度などの影響を強く受けるが、東アジアのネットワークを構築する必要性を強く感じた日であった。



▲ 講演：The Medical Education Programs in Japan

# 初期研修の人気ランキング全国第1位の 東京医療センターでの研修医を観察して思うこと

(東京医療センター・臨床研究センター長・IRCME 名誉センター長) 加我 君孝

東京大学を去って早くも2年半が過ぎました。東京医療センターは国立病院機構146病院を代表する病床数約750床の大きな総合病院です(写真1)。私はその附属研究所とも言うべき臨床研究(感覚器)センターに在籍しながら、臨床・研究・教育に携わっています。日経メディカルによる初期臨床研修の人気病院ランキングでは毎年全国第1位を占め、第2位には聖路加国際病院、第3位は同じ国立病院機構の九州医療センターです。第1位の秘密はどこにあるのか観察して来ました。東京医療センターは世田谷の駒沢オリンピック記念公園の隣の広大なキャンパスの中にある病院で、国立病院機構本部、附属東が丘看護助産学校があります。研修医は臨床研究センターのある管理棟の7・8階にある寮に住み、私のセンターが1・2・5・6階にあるので研修医とはエレベーターでよく一緒になります。礼儀正しく、青春の中の研修生活を感じさせます。東京大学平成19年卒の林玲匡先生は1年目を国立国際医療センター、2年目を東京大学の卒業生として初めて東京医療センターで研修しました。彼によると特記に値する研修の特徴を次のようにあげています。

## ① 全体的な特徴として

- 忙しい診療科(救急部など)と、土日は比較的余裕のある診療科(精神科や麻酔科)などを交互にローテートし、比較的オン・オフがはっきりしている
- 救急外来当直(2年目)では、ウォークインの患者とともに救急搬送患者を同時に診ることとなり、ERに比較的近い救急外来を経験できる

## ② 内科プログラムの特徴として

- 主要な内科以外の内科(腎臓内科、血液内科、膠原病内科など)もローテートすることができる
- 選択期間の選択枠が極めて広い(離島研修、他大学での研修、海外研修も可、※現在はやや制限が生じている)
- 選択期間に一度まわった診療科をローテートするとよりアドバンストな研修を受けることができる

## ③ 外科プログラムの特徴として

- 外科を長期間ローテートし、術者や第一助手などの経験が可能である
- 主要な内科のみローテートする代わりに総合内科の研修期間が長い

林先生は変則的でありましたが、2年目から東京医療センターでの研修が許可され、平成21年5月末で研修を終えたのですが、彼一人のために松本純夫病院長が研修終了証を渡すセレモニーが病院長室でありました(写真2)。私の責任で研修医としての採用をお願いしたのですが高い評価を得たことがわかり安心しました。彼の研修の感想は、「東京医療センターには、研修医を含めると300名近い医師が勤務しています。そのような大規模な病院にもかかわらず、各科の先生方が互いに顔見知りであることが多く、病院全体はアットホームな雰囲気になっています。そして、和気藹藹としたメディカル間やメディカル・コメディカル間の密で良好な関係こそ東京医療センターの魅力であると思います。各科の研修では、(卒後3~5年目の)レジデントの先生とマンツーマンでチームを組むことが多く、手取り足取り様々なことを教えて頂きました。豊富なマンパワーが丁寧な指導を可能にしている一つの要因なのかもしれません。研修プログラムは、ほぼすべての内科と高度救命センターが必須ローテートとなっているのが特徴で、様々な診療科の知識・技術を幅広く学ぶことができます。勿論、殆ど眠れない日が続いたり、深夜の病棟や救急外来で冷や汗をかいたりすることは少なくありません。しかし、優しい上司や同期の仲間に支えられながら充実した研修を送ることができました。」と述べています。このように、研修の内容が充実し、指導体制がしっかりしていることと、お互いに親しい人間関係になることなどで全国一の人気研修病院の評価を得ていることと思われます。ただし私の外来にも初期研修医が見学に来ますが、余りにも細切れのスケジュールでじっくり教育できないのが現行のシステムの大きな課題と思います。

従来のストレート型研修では、「同じ釜の飯を食う」医局では人材の育成には良い面が沢山ありました。専門家とすべく最初の2年間に臨床の基本教育と、厳しく人間面の教育と症例の研究の発表指導ができたからです。現状ではその代わりとなる場はどこになるのが問題です。鉄は熱いうちに打てといいますが現在の初期臨床制度に代ってからは、鉄の熱も少し下がってほどほどになってから打ち始めることになり、臨床と教育の到達レベルが昔のようなレベルにはならないのではないかとというのが私が心配しているところです。

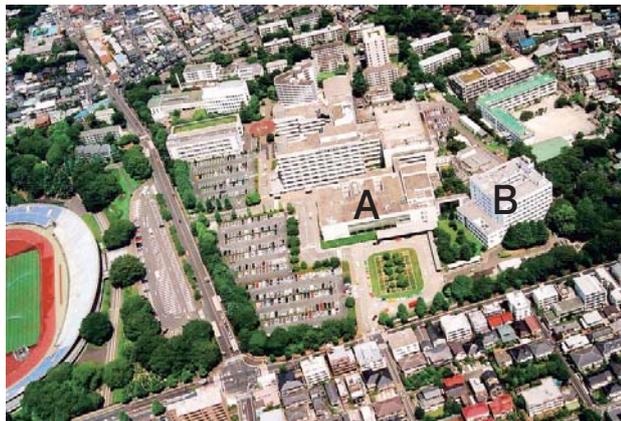


写真1 A:東京医療センター B:臨床研究(感覚器)センター



写真2 左から松本純夫病院長、一人おいて小生、林玲匡研修医

# 2009 年度東京大学医学部 F D ( 医学教育研究会 ) 報告

講師 錦織 宏

2009 年 11 月 7 日 ( 土 ) に 7 回目となる東京大学医学部 FD ( 医学教育研究会 ) を実施した。今回の内容も、昨年に引き続いて研究者育成を主眼にしたものを扱い、「Physician Scientist を育成する」をテーマに掲げた。年に 1 度、教育のことについてじっくりと考えながら議論する時間を提供するという目的は達成できたと感じている。また基礎系・臨床系を問わず参加いただいているため、普段あまり接することの少ない教員同士のコミュニケーションの場としても生かしていた

けたようだ。現在、東大においては、医学教育改革ワーキンググループが教育の充実化のための活動を行っており、本 FD もその活動の一環になっている。本企画を通して、10 年後・20 年後の医療の質のアウトカムに貢献していければと思っている。詳しい内容は報告集にまとめてあるため、ご希望の方は当センターまでご一報いただきたい。なお本 FD は、これまで医学教育ワークショップと呼称していたが、本年より「FD ( 医学教育研究会 )」に変更したことを、最後に申し添える。



▲ 2009 年度東京大学医学部 FD 全体写真

## New England Journal of Medicine を用いた臨床診断推論の授業

講師 錦織 宏

昨年度より、New England Journal of Medicine (以下 NEJM) の Clinical Problem Solving シリーズを用いた臨床診断推論の授業を、M2 学生を対象に実施している。この授業の導入の背景にあるのは、近年の医学の進歩とそれに伴った医療の高度専門化による検査依存型医療の弊害である。2008 年の日本内科学会雑誌 (97:1377-81, 2008) に、元センター助教授の大滝純司先生が興味深い論文を書かれている。

### (1) 腹痛の鑑別

某大学で臨床入門的な部分のカリキュラムを検討する会議が開かれた。参加者は、内科系各科の准教授や講師クラス十数名である。症候学の授業の時間割と担当者を決めようとしていた時に、参加者の一人が発言した。

「いまどき、腹痛の鑑別診断を一人で教えられる人なんていませんよ。」

この発言に、誰ひとり反論しなかった。発言した人は、消化器内科の専門医だった。

医師の行う病歴聴取や身体診察では、客観性の欠けや医師個人の能力への依存性の高さから、それらによって得られた情報から診断を進めていくことの重要性が近年軽視されつつある。しかしながら高度専門医療が発達し、またインターネットなどで医療に関する情報が用意に得られるようになった今日の医師の役割を改めて考えた際に、臨床医の診断推論能力は専門職としての高度な能力の一つとして考えられる。この授業では NEJM の論文を教材に用いて、世界の一流の臨床医の志向のプロセスを追いかける形で、臨床診断推論能力を習得することを目指している。

## 模擬患者つつじの会

特任研究員 三木 祐子

一昨年 10 月の発足以来、現在、第 1～3 期生まで計 30 名以上の会員が養成コースを受講している。既に、本大学医学部医学科の M2 学生の講義「模擬患者 (SP) による医療面接実習総論」には数名が模擬患者役として参加しており、担任の先生方より好評を頂いている。また先日は、本大学 M2 共用試験 OSCE には 12 名が初めて参加するなど、活動の域を広げている。同時に、模擬患者のメンテナンス (質の担保) も必要であり、会員に対し、シナリオアレンジメント (模擬患者としてリアルに演技できるよう、年齢や職業など実際の会員の内容に近づける)、学生へのフィードバック練習、身体診察・OSCE・ファシリテーションの講義などを実施している。

さらに、新しい試みとして、第 3 期生の養成コースより全ての会員を一堂に会している。これは、模擬患者としての経験が長い会員が新人会員に対し、ファシリテーター役を担うことができる、これまでの講義内容が復習できる、会員同士のコミュニケーションが図れるなどを目的としている。



▲ 第 2 期生の修了式

## ● 今後の外国人特任教員招聘スケジュール

センター外国人特任教員として、次の先生をお迎えする予定です。

グレアム・マクマーン (Graham McMahon, M.D., M.M.Sc.)

現所属: Brigham and Women's Hospital

Division of Endocrinology, Diabetes and Hypertension

招聘予定期間: 2010年9月~12月

外国人客員教授の招聘にあたり、野口医学研究所に多大なご支援を賜りましたことを感謝申し上げます。

## ● センター日誌 | 2009年7月~2010年1月 |

<b>7 JUL</b>		13日	ドン大学医学部長・教授
(6月3日-)2日	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西)	16日	「つつじの会」模擬患者養成コース 講習(I)・健康講座
(6月18日-)2日	JICAラオスプロジェクト現地活動(北村)	18日	第17回東京大学医学教育セミナー (西城 卓也 名古屋大学医学部附属病院総合診療部助教)
6日(-8月12日)	平成21年度第1回アフガニスタン医学教育研修受け入れ	<b>12 DEC</b>	
13日	「つつじの会」模擬患者養成コース第3回養成コース (基礎編Ⅲ・応用編Ⅲ)健康講座	8日	平成21年度第2回運営委員会
15日	第13回東京大学医学教育セミナー (レベッカ・ハリソン オレゴン健康科学大学准教授)	9日	第18回東京大学医学教育セミナー (ポプ・アンダーソン ミシガン大学糖尿病研究所・臨床研修センター教授)
16日	平成21年度第1回運営委員会	14日	「つつじの会」模擬患者養成コース 講習(II)・健康講座
<b>9 SEP</b>		24日-1月7日	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西)
11日(-12月11日)	PBLチュートリアル授業	<b>2010 1 JAN</b>	
14日	「つつじの会」模擬患者養成コース第4回養成コース (基礎編Ⅳ・応用編Ⅳ)健康講座	4日-29日	M1フリークォーター
16日	第14回東京大学医学教育セミナー (大西 弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター講師)	18日	カノクワン・スリルクサ(タイ・コンケン病院小児科医師)センター外国人特任講師着任(2月17日まで)
18日	第9回医学教育国際協力研究フォーラム	18日	「つつじの会」模擬患者養成コース 講習(III)・健康講座
29日(-10月30日)	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西)	26日(-2月19日)	JICAラオスプロジェクト現地活動(大西)
<b>10 OCT</b>		27日	第19回東京大学医学教育セミナー (田川まさみ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯学教育開発センターセンター長・教授)
19日	「つつじの会」模擬患者養成コース第5回養成コース (基礎編Ⅴ・応用編Ⅴ)健康講座	30日	東京大学医学部共用試験OSCE実施
(5月25日-)26日	臨床診断学実習(カルテの書き方)実施		
(5月20日-)28日	臨床診断学実習(模擬患者による医療面接実習)実施		
28日	第15回東京大学医学教育セミナー (神津 忠彦 東京女子医科大学名誉教授)		
<b>11 NOV</b>			
7日	東京大学医学部FD		
4日(-12月2日)	臨床診断学実習(New England Journal of Medicineを用いた診断推論)実施		
4日(-2月3日)	臨床診断学実習(HDPE身体診察診断学習とシミュレーターを用いた技能実習)実施		
4日(-12月8日)	平成21年度第2回アフガニスタン医学教育研修受け入れ		
12日-26日	JICAラオスプロジェクト現地活動(北村)		
13日	第16回東京大学医学教育セミナー (ピーター・ジョン・リース キングスカレッジ・ロン		

## ■ 編集後記

ようやく寒さも緩む季節となって参りました。センターでは、前号で皆様にお伝えしましたプロジェクト・イベントに、引き続き力を入れて取り組む一方、今期はアフガニスタンより研修員を受け入れ、1ヶ月半の研修を行うなど一層賑やかな日々を送って参りました。来年度は、いよいよセンターも設立10周年を迎えます。今後も、センターの活動をどうぞご期待ください。また、皆様が新しい年度を力いっぱい踏み出されますようお願い申し上げます。(岩)



## ■ 発行元

発行 2010年3月27日  
 発行人 山本 一彦  
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター  
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254  
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp  
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp  
 印刷所 三鈴印刷株式会社